

 特集

精神科臨床にみる家庭・家族の現在—何が変わり何が変わらないのか？

特集にあたって

飯森真喜雄*

精神分析はさておき、第二次世界大戦をはさんで米国を中心に精神疾患を家族内人間関係の見地から解明しようとする研究が広まり、「家族研究」として1970年代まで盛んに行われた。日本でも当時の本誌には家族研究の論文が多く掲載されている。有名なものとしてFromm-Reichmannによる「統合失調症を生む母親 schizophrenogenic mother」やLidzによる「分裂した/歪んだ夫婦 marital schism/skew」, Batesonらによる親子間コミュニケーションの「二重拘束 double-bind」やWynneらの「偽相互性 pseudo-mutuality」など主に統合失調症関連のものが、そして家族研究を元にして後に「反精神医学」の運動に立ったLaingらのものがある。これらは今日の目から見た当否は別として、精神疾患を「内因」や「個人内部性: intraindividuality」から解き放ち、家族の在り方や家族内力動、ひいてはそれに影響を与えている社会変動という外の要因に精神科医の目を向けさせたという点では多大な功績があった。

こうした研究は主に力動的な見地に立つほか社会学など他領域からの視点も入って行われてきたが、その後はいうまでもなく、「家族研究」というとすっかり遺伝生物学にシフトしてしまった(そもそも家族研究は遺伝生物学から始まったのだが)。

しかし依然として、精神疾患や心理的問題の成

り立ちや表現形には家庭や家族のありようが色濃く反映され、特に治療場面ではそこに踏み込まないとうまくいかない場合が多いことは臨床家なら誰でも分かっている。また治療者は同時に、経済のグローバル化や情報化の急速な展開による社会の複雑化と龐大化に伴う家庭や家族の変貌も実感しているし、さらには晩婚化や少子化、高齢化、引きこもりや発達障害とされる子どもの急増などが旧来の家族観ではカバーしきれないということも痛感している。かつて太宰治が「家庭(の幸福)は諸悪の根源だ」と述べたような、その「家庭」はどこへ行ったのだろうか。あるいは、高度経済成長下で日本人が素朴に信じていた、目的としての「理想の家庭」というものは実はもうどこにもないのではないかとさえ感じることもあろう。

戦後70年の日本社会を振り返ってみると、たとえば戦後日本の社会変動と日本人のこころのありようを俯瞰的にとらえた社会学者の大澤真幸の説を借りれば、①各家庭が同じ「理想のマイホーム」を夢見て高度経済成長の波に乗り所得を増やす一方で公害問題などに無関心であった「理想の時代」、②オイルショック以降、物質的満足を超えて「情報の差異」自体のために消費を行う「虚構の時代」(大澤は父親以外の家族が個室に籠もることを前提とした「オタク文化」こそ、その象徴であると指摘している)、③オウム事件以降そ

* いいもりこころの診療所(☎ 113-0024 東京都文京区西片1-3-18), IIMORI Makio: Iimori Kokoro Clinic, Tokyo, Japan

の虚構さえ崩れ、家庭の絆よりもインターネットによって偶然につながった他者との結びつきのほうがより「リアルな関係」であり必然的であるかのような「超現実の時代」(大澤は「インターネット心中」や恨みを抱いていなかった肉親や親友を通常では理解できない理由によって殺害する事件などに表されると説いている)、と変貌してきた。

これは社会学者による一つの仮説にすぎないが、翻って我々精神科医は家庭や家族の変貌をどのように捉え、何を手掛かりとして、どこに治療目標を定めて診療をしているのであろうか。これらをみていくことは臨床上無論のこと、精神疾患や病態の変遷、事例性や疾病性の変化、あるいは

精神科医が治療上望ましいと想定する「家庭の在り方」などを考える上で意義があると思い、日ごろ家庭や家族の問題に目配りしながら診療や研究をされている方をお願いして特集を組んでみた。「家庭もしくは家族の変容はあるのか? あるとしたらどんなふうに変容し、どのような形で臨床場面に表れているのか? ないとしたら何が変わっていないのか? それはなぜなのだろうか? 精神医学的にみて家庭や家族はどうあるべきかという問いに正解はあるのか?」などといったことについて自由に語っていただいた各論文から、読者がさまざまに連想を広げ、診療や研究のヒントにしていいただければ幸甚である。